



日本現代文學全集・講談社版 67

新感覺派文學集

附 新感覺派評論集

編集

伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙
山本 健吉

日本現代文學全集

67

新感覺派文學集

編 集

伊 藤 整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙吉
山本健吉



昭和43年10月10日 印刷
昭和43年10月19日 發行

定 價 600 圓

© KODANSHA 1968

著 者

郎 兵衛 健 光 郎 雄 郎 作
三 義 鐵 木 足 三 次 金
谷 岡 木 養 垣 谷 木 濱
十 片 佐 大 稻 今 池 菅 鈴 石

發 行 者 野 間 省 一

印 刷 者 北 島 縷 衛

發 行 所 株式會社 講 談 社

東京 都 女 京 區 音 羽 2-12-21
電 話 東 京 (942) 1111 (大代表)
郵 便 番 号 1 1 2
製 替 東 京 3 9 3 0

大日本印刷株式會社
株式會社 興 陽 社
株式會社 大 造 堂
株式會社 岡 山 紙 器 所
株式會社 石 井
日本クロス工業株式會社
日本加工製紙株式會社
本州製紙株式會社
安倍川工業株式會社
三菱製紙株式會社
神 岡 製 紙 株式會社

印刷 製 刷 本 函 革
寫版 眞 印
製 製 製 背
表紙 クロス
口 繪 用 紙
本 文 用 紙
函 貼 用 紙
見 返 し 用 紙
扉 用 紙

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

新感覺派文學集 目次

卷頭寫眞

十一谷義三郎

靜物……………七

花束……………二七

青草……………三

白樺になる男……………六

風騒ぐ……………三

あの道この道……………三

仕立屋マリ子の半生……………四

片岡 鐵兵

幽靈船……………六

生ける人形……………六

佐佐木茂索

おぢいさんとおばあさんの話……………一五

曠日……………一九

選舉立會人……………一六

困つた人達……………二〇

犬養 健

牧歌……………一六

南京六月祭……………一八〇

亞刺比亞人エルアフィ……………一七〇

稻垣 足穂

黃漠奇聞……………二〇三

星を賣る店……………二〇四

一千一秒物語……………二〇一

散歩しながら……………二〇〇

天文臺……………一九二

今 東 光

軍 艦……………一九五

瘦せた花嫁……………二七三

池谷信三郎

おらんだ人形……………二六五

橋……………二九五

菅 忠 雄

銅 鑼……………三〇九

美しい姉の事……………三二三

二つの心裡……………三二六

鈴木彦次郎

宗次郎は跋だ……………三〇

七月の健康美……………三〇

石濱 金作

ある死ある生……………三四〇

喜劇……………三四五

新感覺派評論集 目次

新感覺派の誕生……………三七

若き讀者に訴ふ……………三〇

新進作家の新傾向解説……………三六四

感覺活動……………三六九

昨日への實感と明日への豫感……………三七四

新象徵主義の基調について……………三七七

末梢神經又よし……………三八二

新感覺派は斯く主張す……………三九七

新感覺派の表……………三九一

文藝と時代感覺……………三九六

止めのルフレエン……………四〇〇

新感覺派とコンミニズム文學……………四〇二

作品解説……………	瀬沼茂樹〇七
新感覺派文學入門……………	保昌正夫四二五
年譜……………	四三
參考文獻……………	四四四

新感覺派文學集

十一 谷義三郎

靜物

一

家を持つて間のない道助夫妻が何かしら退屈を感じ出して、小犬でも飼つて見たらなどと考へてゐる頃だつた、遠野がお祝ひにと云つて喙の紅い小鳥を使ひの者に持たせて寄來してくれた。道助はその繩を縁先に吊しながら、此の友人のことをまだ一度も妻に話してなかつたのを思ひ出した。

「古くからの親友なんだ、好人だよ。」と彼は妻に云つた。

「では一度お招びしたらどう。」と彼女が答へた。道助はすぐに同意した。彼女はその折りに食卓に並べる珈琲茶碗や小皿のことなどに就て細々と彼に相談し初めた。

二三日して彼は郊外にある遠野の畫室を訪ねた。明るい光線の満ちた部屋の中に、いつの間にか成されたのか新しい制作が幾つも並べられてゐた。それを見てみると道助は急に自分の影が薄れて行くや

うな苛だたしさを覺えた。

「君、これは光線の具合だらうか、」と遠野が這入つて來るなり彼の顔を凝視して云つた、「どうも君の顔が變つたやうな氣がする。」そして彼は畫室の隅に立てかけてある、八分通り出來上つた道助の肖像畫の方へ振り返つた。

「どうしてだらう、あれを描いて呉れてた時分からまだ半月も経たないよ、」と道助が微笑みながら答へた。すると遠野は急に道助の肩を揺すつて

「あゝ君は幸福過ぎるんだ。」と叫んだ。

「君は大變な人相屋だ。」と道助は皮肉な氣持ちで答へた。遠野は故意とお道化た風に點頭きつゝ棚から口の短いキュラソウの壺を取り下ろした、そしてそれを道助の洋盃へ酌ぎながら

「兎も角君も落ちついたと云ふものだ。」と云つた。それは、その頃まで道助の周圍を取り捲いてゐた空氣の明暗をよく吞込んだ言葉だつた。然しそれを聞くと、道助は却つて自分の氣持ちが妙に硬ばるのを感じた。で彼は窓の外へ眼をやつた。

「何か感想がありさうなものだな。」と遠野は笑ひながら云つた。

「話さうと思へば無くもないさ、然しそんなことは馬鹿げてる。」と道助は呟くやうに答へた。

「その馬鹿げたことを訊いてるのさ。」と遠野が今度は椅子の上に反り返つてのびをしながら云つた。そしてすぐに彼は「實際、面白いことはさう澤山無いよ。」と付け足した。その調子が可笑しくて道助は思はず噴き出した。それに連れて遠野もお腹を抱へた。

するとその彼等の聲に應じるかのやうに扉を叩く音が靜かに響いて來た。道助は立ち上つた。

「いゝんだよ。」と云ひつゝ遠野はまたキュラソウの壺を取り上げた「でどうだ。あの鳥は？」

「あゝ失敬、彼女が大變喜んでゐるよ。退屈なものだから。それでね、是非一度君を招待しろと云ふんだ。」

「あゝその使ひに來てくれたのか、ありがたう、ゆくよ、奥さんにも逢つとかなくちやね。」

その時、劇しく扉が明け放たれた。そして濃い空色のショウルを自暴に手首に巻きつけたモデルのとみ子がつと這入つて來た。彼女は片手に持つてゐた花束を亂暴に床の上に投げ出して、どんとぶつかるやうに遠野の肩に凭れかゝつた。

「どの奥さんに逢ひにゆくのだよ。」そして手を伸ばして遠野の前にある洋盥を取り上げた。

二

「この紳士の奥さんさ。呑んだくれのトムミイ、」さう云ひつゝ遠野は靜かに彼女の洋盥へキュラソウを酌いでやつた。

「あら、ご免なさい。」彼女はさう云つてちよつと道助の方へ頭を下げた。

「そして綺麗な方？」

「君のやうにね。」と少し酔が廻つて來た道助が口を挟んだ。

「おや、ご挨拶ですこと。でもお大事になさるんでせうね。」

「それはもちろん、」

彼女はちらと擲擲ふやうな視線を遠野に向けた。遠野がすぐに云つた。

「然し君のやうに此處にぶく／＼ぢやないんだとき。」そして彼は眞白な彼女の胸首をびしりと叩いた。

「ぢや古典派だ、流行らないのよ。」さう云ひつゝ彼女はちよつと遠野を睨まへた。彼等は噴きだした。

「君は何派だ。」と道助が訊ねた。

「妾や未來派さ。」と故意と取り澄まして答へながら、彼女は遠野の膝の上でその豐滿な身體を弛やかに揺すり初めた。

遠野は彼女のするがまゝになりながら、立て續けに洋盥を乾した、彼の眸や唇に、時々ちら／＼と何かが燃え上る、それを隠さう

とするかのやうに、彼は細長い指を伸べて食卓の端を叩きながら低く唱ひ始めた……

その様子を見ると道助は少し堪へられなくなつて密つと椅子を離れた。そして先刻彼女が抛り出した花束を拾ひ上げて、殆ど無意識にその花片を一つ／＼むしり初めた。

「おいとみ子、一つダンスをやらう。」さう云つて遠野が不意に彼女の首筋を抱へて飛び上つた。

「ほら始まつた。」と云ひながらとみ子はちらと道助の方を見た。

「あゝ君は一つ囃子方になり給へ。」遠野が道助に云つた。道助は漠然と微笑みながらバネの弛んだ自働人形のやうに部屋の中を歩き廻つた。

恰度部屋の中へ天窓から強烈な光線が落ちてゐる。その中へ遠野ととみ子とは白い兩手を握り合つてふら／＼と立ち上つた。

「ほんとに踊る氣かい、君達は。」と道助が訊ねた。それを聞くととみ子が崩れるやうに笑つた。

「踊たつて好いぢやないか。」と遠野も笑ひながら答へた。

「まるで君は日本にあるやうぢやない。」と道助が云つた。

「そんなことはどうでも好いさ。」さう云つて遠野は強くとみ子を抱きかゝへた。

その時雲がよぎると見えて部屋の中がちよつと暗くなつた。それと共に、道助は何かしら白けた氣持ちが自分を犯して來るのを感じた。

「おい、君は何を考へてゐるのだ。」と遠野が叫んだ。

「囃子方も看客も僕はご免さ。」と道助は吐き出すやうに云つた。

「ぢや貴方踊らない？」さう云つてとみ子が彼の方へ大きく兩手を擴げた。

それを見ると道助の氣持ちは一層拘泥し初めた。何か斯う際立つて明るい世界の前に急に頭丈な扉が聳え立ち、その外に自分獨り取り残されたと云ふやうな……あゝ道助は妻の顔を思ひ浮べてゐたの

だつた！

「僕はもう失敬するよ。」

「どうしたんだ、急にまた、」と遠野が訊ねた。

「僕はもう享樂出来ないんだ。」と道助は明らかに答へた。「意氣地が無いのね。」と云ひつゝとみ子が彼の背中をどんと叩いて遠野と顔を見合せた……

三

獨身——制作——とみ子、その三つのものを結び合せて遠野のことを考へると、道助は自分が何かしら慘めなものに思はれた。彼は或る時の妻の瞳を思ひ出し、また彼女の髪かみの震へを感じた。然し彼の心はもうそれらに對してまるで路傍の人のやうな冷靜さに裏つけられてゐた。

彼はぢつとしてゐられない氣持ちになつた。である日、手簾笥の底から彼が結婚前に書きかけてゐた自敘傳的な創作の原稿をとり出した。

「おい、これから少し仕事をやらなくちやならないんだ。」さう妻に云つて彼はその原稿を一枚一枚讀み返した。

「なあに、小説？」と云ひつゝ彼女が馴々しくそれを覗き込んだ。

「見ちやいけない。」と彼は叫んだ。

「悪い顔。」と云ひながら彼女が眼を睜はつた。

「ちよつとあつちへ行つてみてくれ。」と彼は押しつけるやうに云つた。彼女は少し着い顔をして隣室へ立つていつた。彼はそれを追ふやうにして間の唐紙に手をかけた。彼女がぢつと反抗的な視線を彼に投げる。彼は強ひて笑顔を作りながらびたりと唐紙を閉めた。そして一度原稿紙を取り上げた。

彼の頭は暫くその上と隣室へと等分に働きかける、そして結局焦躁のために混亂してしまふ。

「こんな洞察のない、こんな上滑りのした空想ぢや駄目だ」とさう

呟きながら、彼がそれをまた手簾笥の引き出しへ投げ込んで鍵を下ろした時、彼は裏口が明いて彼女の出てゆく氣配を知つた。彼は巻煙草の吸口をぎゅつと噛み占めた。

あゝ今、彼の眼の先へ息の詰まる程の鮮さを持つた空想の世界が、何か魔術にでもかゝつたかのやうにすつと現れて來たら、彼はどんなに幸福だつたらう！ 然し、彼の前には、實のところ空漠とした煙が卷上るのみだつた。

道助は溜息をつきながら立ち上つた。そして何か遠くにあるものを求めるやうな氣持で靜に裏口を出た。

三四間ゆくとは彼は急に忙々いそいそと歩き出した。「何處へいつたのだ、彼女は。」さう呟きながら。

「好いお天氣でございます。」と聲をかけつゝ牛乳屋の主婦かみさんが頭を下げた。道助はちよつと會禮をしてゆき過ぎた、「あの人の鼻はどうしてあんなに大きいのだ！」……

いくら行つても妻の姿は見えなかつた。そして路上を這つていく自分の長い影法師が一層彼の氣持ちを苛だたしめた。彼はすぐに引き返した。

彼が荒々しく硝子戸を明けると、仄暗い茶の間の鏡の前に、彼女が身動きもしないで坐つてゐた。彼は黙つてその傍を通り抜け書齋の眞中へ仰向に身を投げだした。彼はぢつと眼を見開いた。しんとした中に眼に見えぬ力が執拗に彼を壓して來る。彼は身を刺すやうな憎惡を感じた。ビ・リ・リ・リ・リと叫びながら遠野のくれた豚の紅い小鳥が籠の中で跳上る。彼は立つて水を換へてやり、それからつか／＼と茶の間へ這入つていつた。と涙が彼女の硬ばつた頬を傳ひ白い手の甲の上に落ちた……

四

同じ日の夜、道助は少々退屈を意識しながら彼女の前に坐つてゐた。彼女は用心深く彼の視線を外しつゝ何氣ない世間話の中へ彼女

「從姉の不幸福結婚の話の細々と織り込んでいつた。道助は「これは初めて聞いた」と云ふ風に時々彼女の方へ點頭うなづいて見せながら、ぼんやりとそれを聞いてゐた。で最後に彼女が

「それであの人達が苦んでゐるのは、結局今更どうにもしやうのない秘密の世界をお互して作りあげてしまつた所爲だと思ふのよ、」と云つて彼の眼を盗み見た時にも、道助は矢張り先刻からの退屈の情力で「うん／＼」とか何とか云つたきりだつた。夫を見るに彼女は硬い笑ひを浮べ乍ら

「つまり心の何處かにちよつと忍ばせて置いた小つちやなことから大きな秘密が生れることにもなるのだわね。」と云つて今度は眞正面に彼を凝視した。

「あゝこれは遂々そんなところまで引張つて來たのだ！」さう考へながら道助は故意と揶揄てやうふ様に「そしてその小つちやなことと云ふのは女の胸の方に忍びこんでゐることが多いんだね、第一女は隠すことを知つてゐるからな。」さう云つて笑つた。

「いゝえ、いゝえ」と彼女はカブリを振りながら云つた。それから急に湧き上つて來る興奮に震へながら、

「あなたは妾に信頼して下さらない。」と細い聲で云つてきつと口を緘しづんだ。道助は少し險しい眼つきをした。

「あなたは妾に見せられないものがあるのでせう、いゝえ、あの手簾てりの引き出しには何が藏つてあるか、妾にはよくわかつてゐます。」

「秘密の城を築くと云ふのはおまへのことだ。」と道助は故意と冷笑するやうに云つた。

「妾はあなたに見せられないやうな鍵は持つて居りません。」と彼女が執拗に答へた。彼は強ひて自分の氣持ちを抑へながら云つた。

「昔、ある天才が自分の書いたものを眞珠を鏤うめた箱に入れて密つと藏つておいたと云ふ話がある、そんな氣持ちはお前にはわかるまう。」

「それはお嘲たとして承れば美しいことかも知れませんわね。」さう云つて彼女は靜かに微笑んだ。

それを聞くと道助は遲緩ちかんさに堪へられなくなつて、「馬鹿、お前にはわからない。」と叫んで横を向いてしまつた。彼女はちらと追窮するやうな視線をそれに向け、そのまゝ俯向いて編物の針を擽く擽く的に動かし初めた……

然し暫くさうして口もきかないでゐると、道助は何かしら淋しくなつて來た。で彼は遂々錢入れの中から白く光る小つちやな鍵をとりに出して彼女の膝の上に投げやつた。

「おまへには恰度好い玩具だ！」

「えゝゝ大人しく遊びますわ。」急にさう氣輕に云つて、彼女はそれを帶の間へ藏ひこんだ。道助は忌々しさにそれを見た。その手簾の引出しには彼の獨身時代を淡く色つける四五百通の手紙と彼が今日晝讀み返しした舊い原稿とが這入つてゐるのだつた。

五

二三日道助は創作に没頭した。それが殆ど半ば程進んだ頃のある曇つた日の午後。

彼はもう何枚目かの原稿紙を破り棄て、低く垂れた空へ疲れた眼を見据えてゐた。彼女は彼女でその傍に少し膝を崩して坐り、當のない憂鬱に引き込まれながら、先刻道助が癪癪しやくしやくを起して物置きの中へ抛り込んだ小鳥の鳴き聲を追つてゐた。まるで彼等の生活は、その時硝子瓶の中へ閉ぢこめられたやうなものだつた。音、光、色彩、運動、そんなものが凡て自由性を失つてしまひ、たゞ白けた得體の知れぬ現實がぐん／＼と押し迫つてくる……

道助は額の汗を拭いて立ち上つた。それを見るに彼女も立ち上つた。道助は靜かに玄關へ出た。すると彼女も密つとついて來た。彼は振り返つて彼女の眼を見た。その鞆膜が變に光つてゐる。

「おい、俺は少し散歩するよ。」と彼が小聲で云つた。

「妾も参ります。」と彼女も小聲で答へた。

「お天氣の所爲かな。」と道助は歩きながら考へた。

暫くゆくと彼は聲音がちつとも聞えないのに氣がついた。で彼は愕然として背後へ振り向いた。そこに彼女がほんの一尺計り離れて彼に憑いてるやうに歩いてゐる。

「あゝ俺は少し頭を使ひ過ぎる。」さう道助は思つた、で彼は高聲にお饒舌を初めた。

「おい俺は豚を二三匹飼はうと思ふよ。」と彼は妻に云つた。

「豚、この街の眞中で。」と彼女が闇い顔をして反問した。

「あゝ、よく光る太陽の下で、豚と一緒に駈け廻り、ふざけ合ひ、寝つ轉がり、臀を叩き、あゝおまへ豚の皮膚の色を知つてゐるから。」と道助は調子に乗つて云つた。

「まあ豚——」

ふいと道助は、眞白い太つた女の兩腕が、彼の眼の前に大きく擴げられてゐる幻を見た。「とみ子！ たしかさう云つたな、あのモデル。」と彼は思はず呟いた。

「えゝ」と云ひながら、彼女が探るやうに顔を寄せた。その引き締つた頬を見ると、道助は急いで眼を背向けて少し速足に歩きだした。彼は歩きながら今度は、いつか懇意な醫者から聞いたある若い男の話を思ひ浮べた。その男は小さな時から音楽に對して殆ど狂的な興味を持つてゐた。それが或る日その醫者を訪ねて来て、自分は音楽研究のために二三年獨逸にゆきたいと思ふが少し調子が變だから精神鑑定をやつてくれと云つた。で醫者が容態を尋ねると、自分には今までの形と音との區別がハッキリとつかないと云ふのである。例へば一つの茶碗を見ると、すぐに彼の耳に瀬戸物の打ち合ふ音が聞えて来て、茶碗そのものの形は、何か斯う空に懸つた朦朧とした曲線とでも云ふやうに音の裏に浮き上つてしまふと云ふのであつた……

道助がそんなことを考へ續けてゐると彼女が強く手を引張つた。

「その顔色はどうしたんだ。」と彼が苛々と尋ねた。

「あなたの顔も蒼白いのよ。」と彼女が云つた。

雨が落ち初める……彼等は立ち止つた。

「おい、」とその時晴やかな聲が響いた。道助は急に明るい光線が頭の上に落ちて來たやうに思つた。そこに遠野が畫布を抱へて、大股に彼等の方へ近づいて來るのだつた。

六

食卓の上に青いシェードをかけた電氣のスタンドが燈され、その明るい光線の中に、遠野と道助とが少し興奮して坐り、シェードの蔭には彼女が澄んだ瞳をちつと彼等の方へ見開いてゐた。

「久振で愉快な晚餐をやつた。」と遠野が云つた。

「君なんか自由だから始終旨いものを漁つてゐるのだらうからな。」

「いや、餘り自由ぢやないよ。」

「そんな筈はない。何と云つても獨身時代が好いさ。」

「奥さんに叱られるよ、そんなことを云ふと。」

「なあに、ほんとさ。」

「然し僕は正直のところ、結局意志の問題だと思ふな。一つの意志さへあつたら、結婚しようが獨身だらうがさう問題ぢやないと思ふのだ。」

「そんなことを考へたよ、僕も。然し結婚して見るとわかるよ。」

「そんな筈はない。」

「だつて二人になると、お互の間の闘争と妥協とで精一杯だ。正直になれば喧嘩だ。狭くなれば探り合ひかマヤカシだ。意志なんてものを認める餘裕はありはしないよ。」

「君は最も平凡な一面を忘れてゐるのだ。」

「無いものは忘れやうがないよ少くとも僕には。」

「君は餘りに拘泥し過ぎる。」

「君は餘りに肯定し過ぎる。」

「ぢや君は結局君達の生活を否定しようとしてゐるのだね。」

「少くとも君が考へてゐるらしい穏な、一致とか互助とか云ふ意味の生活は僕には遠いね。」

「子供が出来ても矢張り君はそんなことを考へてゐるだらうか、新しい生命の創造と云ふことが起つて來ても矢張り君はそんなに個人主義者かい？」

「一層ひどくなる許りだ。それはむしろ結婚生活の破壊だもの。」

「君のやうな利己主義者にかゝつちや叶はない。」

「僕は利己主義者ぢやない。僕は眞面目に正直なことを云つてゐるのだ。」

「わからないな、僕には。」

遂に遠野は投げるやうにさう云つて、傍に黙つて聞いてゐる彼女の方へ笑ひかけた。然し彼女の視線は凍りついたやうに一つ處を動かさなかつた。

床の壁に遠野が今日持つて來た道助の肖像畫が立てかけてあつた。シェードに蔽はれた光線が恰度その額のところまで這ひ上り、その黄色を吸ひとつて石のやうに白く光らせてゐる。道助はそれを見てゐた。

「君、あの顔は少し冷た過ぎやしないか。」と彼は遠野に云つた。それを聞くと彼女はふと皮肉な微笑を口許に浮べた。

「そんな筈はないんだが。」さう云つて遠野はちよつと考へた。

「いゝえ、神經質で冷淡でそして何處か引込思案な氣性がよく出てゐますわ。」と彼女が少しきつい調子で口を挟んだ。

「あゝこれは大變なところを掴まれたものだ。」遠野が笑ひながらさう云つて道助の顔を見た。道助は少し敵意を感じてちつと眼を伏せた。

「實はあれを描いた時、僕は片一方で裸體畫の制作にかゝつてゐたのだ。」と遠野がすぐに説明した。

「それが馬鹿に好い調子が出てね自分でも大變愉快だつたのだ、と

ころが君のあれにかゝると、怒るかも知れないが妙に氣持が違ふんだ。何か斯う全く相容れぬ力に犯されてるやうでね。つまりそんな意識が働いて多少誇張したことになつたかも知れないんだ。」

七

その制作と云ふのは、この間遠野が畫室で逢つた例のとみ子をモデルにしたものに違ひないと道助はすぐに思つた。すると奇體にも彼の眼の前へそのとみ子の影像が不可思議な鮮かさをもつて現はれてきた。

——彼女の指先の紅らみの中に浮き出てゐた細りとした指半月、豊かな彼女の唇を縁づける操るやうな繊細な彎曲、房々と垂れた彼女の髪（髪）の微な動揺と光澤、彼女の首筋から兩肩へかけての皮膚の純白さと膨らみ、彼女の笑（笑）凹、彼女の齒列び、とり別けて、その魂の火が燈つてゐるやうな大きな瞳——

道助は立ち上つて縁側の籐椅子に腰をおろした。

「奥さんの一枚描かして貰ひませうね。」と遠野が云つた。

「えゝどうぞ、でもそんな風に誇張をなすつちや厭ですわね。」と彼女が答へた。

「この表情の乏しい女の何處に興味があるのだらう。」と道助は傍で考へた。

「大丈夫ですよ。それに奥さんのを描いとくと、いつかそれが里村君の先刻の結婚論に對する立派な反證になる時が來ると思ふんだ。ねえ君。」

「大變な曰くがつかますわね。でもそんなら妾描いて頂くわ、」

「反證つて？」と道助が訊いた。

「つまりほら、家のお祖父さんはあんなに若かつたのだとか家のお祖母さんはあんなに美しかつたのだと話される時が來ると云ふんだ。」

「つまらないことを云つてゐる。然しそれなら君は何故結婚しない

んだ。君の云ふやうだと夙くに結婚してゐて好い筈ぢやないか。」

「時機と相手が出来次第だよ、僕は結婚を否定しないんだからな。」と遠野は皮肉な微笑を浮べて答へた。

「君、あの何とか云つたモデルはまだやつて来るのか？」と道助がそれに反撥するやうに云つた。

「とみ子か、来るよ。今また一枚大きなものにかゝつてゐるのだ。」と遠野は平然と答へた。

「何處に住んでゐるのだ、あんな女は。」

「あんな女はB街に住んでるんだ。」

「大變遠いぢやないか。」

「遠くとも来るのさ。それはさうと何なら一度連れてつてやつても好い。」

「あら貴方その人の家までご存じなのですか？」

「来いと云ふから一度行きましたかね。」さう云つて遠野は笑ひながら少し赤くなつた。

「若いんでせう、その人。」と彼女が執拗に訊ねた。

「二十歳だつて云つてますがね。どうだかわからない、ねえ君。」

「いや十五六かと思はれる時があるよ。」

「皮肉かいそれは。」

「ほんとさ。」

「驚いたね、僕の考へとは十も違ふ。」

「それを聞くに彼女が笑ひ出した。」

「年がいつてゐてもあんな氣持ちだと好いな。」そんなことを道助は仕方なく呟いた。

暫くして遠野は立ち上つた。彼等は戸口まで送つて出た。「奥さんほんとに描きに來ますよ。」と遠野が云つた。「どうぞ」と彼女が答へた。「好いだらうな。」と遠野は彼にも云つた。「うん」と道助はぶつきら棒な返事をして空を見た。雪が歇つて薄明かりのさしてゐる中を長い雲が走つてゆく。

八

次の日、ふと道助は昨日腹立ち紛れに物置の中へ抛り込んでそのまゝになつてゐる小鳥のことを思ひ出した。もう晝近くのことですり餌をやる時刻はとつくに過ぎてゐたのだ。彼は慌てゝ物置の戸を開いた。

壁の節穴から一條の光線が差し込んでゐる。小鳥はその方へ首を伸ばすやうにしてちつと泊まり木にとまつてゐた。道助は密つと側に寄つて籠を取り上げた。然し小鳥はまるで放心したやうに身動きもしない。嘴で掻き亂したものか細かい胸毛が立つて居り、泊り木に巻きついてゐる繊細い足先には有りつ丈けの力が傷々しく示されてゐる。

道助はちよつと籠をつゝいた。とすると小鳥は三度呼吸するやうに翼を擡げた。その動作が如何にも緩慢で、まるで焦點の合はぬ物體を無理に二つ重ねたと云つたやうな不自然な感じを起させた。

道助は妻を呼んだ。

「闇かつたからきつと眠り過ぎたのよ。」と彼女が云つた。

「お腹が減つてゐるんだよ、何故餌をやつて呉れないんだ。」そんなことをつけ／＼云ひながら道助は餌壺の手當をした。然し新しい餌が眼の前に盛られるのを見ても、小鳥は化石したやうに動かなかつた。道助は密つと鳥の胸に手をやつて見た。ふと自分の指先が大きな醜いものに感ぜられる。

「おまへが見てやつてくれないからいけないんだ。」と道助は一度妻に云つた。

「こんな處へ入れてお置きになるのがいけないのよ。」と彼女が云ひ返した。彼は鳥籠を彼女に押しつけた。

「死ぬんぢやないでせうね。」と彼女が少し懼れを感じて尋ねた。

「死ぬに定まつてるさ、こんな風ぢや。」道助は吐き出すやうに云つた。

「どうすれば好いのでせう。」

「どうすれば好いかな。」さう云つて彼はちよつと妻の顔を見て、そのまゝふいと書齋へ引き返した。

「何とかしてやつて下さらないんですか。」と彼女が背後から聲をかけた。

彼は讀みかけの書物を取り上げた。然し何かしら心が動揺してちよつと筋を追つてゆくことが出来なかつた。で彼はすぐに書物を投げ出して隣室へ眼をやつた。

彼女は鳥籠を縁先に吊し何か口の中で歌ひながらそれを覗き込んでゐた。太陽が籠の目を抜けて彼女の顔に落ちそこに薄呆けた斑点を作つてゐる。道助は起き上つてまた彼女の方へ近寄つていつたと少し籠が揺れ細い羽が風の中に掠はれてゆく。

「あゝ死ぬゝ」さう云つて彼は茶の間に置いてあつた帽子をとり上げた。

「何處へいらつしやるのよ。」と彼女が詰るやうに云つた。

「何處へだか僕にもわからんよ。」

そして彼は彼女には構はないで外に出て、兎も角も電車の停留所の方へ歩き出した。

九

七つ目の停留所で道助は電車を降りた。降りるとすぐ彼は右手の小綺麗な小路へ曲つた。そしてショウインドウを覗きながらゆつくりと歩き出した。實はこれは彼には全く初めての街筋なのである。

彼には學生時代からそんな癖があつた。手拭と石鹼とを持つて兎も角も電車に乗るのである。そして幾つ目の停留所で降りそこから第一番目の四ツ辻を右へ曲りその通りにある錢湯へ飛び込んでゆつくり身體を流して戻つて來るのである。退屈がりの彼はその道筋で出逢はした顔や聞いた話などに一つ／＼ころもを被せて喜んでゐたのだつた。

彼は路傍の小ざつぱりとした珈琲店に這入つた。客は一人も無く暖爐臺の上の蓄音器の傍に赤く塗つた鳥籠が置かれ、その中で目白が盛んに囀つてゐる。彼はちよつと家の小鳥と妻の顔を思ひ出した。然しそれもすぐ散漫な氣持の中に溶け込んでしまつた。

「今日は出来るだけ幸福でなくちゃ。」とそんなことを考へながら、彼は熱い珈琲を吸つた。それから新聞をとり上げて一とわたり經濟欄や政治欄に眼を通したが別に愉快なことも起つてゐないので今度は表の方へ眼をやつた。入口の扉が兩方に明け放たれ、その間に霞簾が吊下り、その向うに明るい往來が見えるのである。

ふとそこを青いバラソルをさした太り肉の丈の高い女が行き過ぎる。傘の青みが顔に落ちてよくはわからないが、色の白い眼の大きな女だと道助は思つた。と同じ瞬間に、その女のショウルと帶の色合ひと横顔の輪郭とがハッキリと彼の記憶に再燃した。それはモデルのとみ子に違ひなかつたのだ。彼は忙いで拂を濟ませて外に出た。そして六七間先にゆく彼女の後を追つた。

このまゝ後をつけて行つて見ようかそれとも追ひついて聲をかけようか、そんなことを道助が思ひ迷つてゐる間に彼女は横町へ外れてしまつた。彼が小走りにその曲り角へ來た時、彼女は恰度三四間向うの左手の格子戸の嵌つた家へ這入るところだつた、這入りながら彼女はふいと背後を振り返つた。道助は少し狼狽へた。彼の姿は厭でも彼女の視線の中に入らねばならなかつたのだ。道助は仕方なく微笑んだ。それを認めたのか認めないのか彼女は無表情な顔をついと背向けたまゝ、格子戸の中へ消えてしまつた。

道助にはその家の表札を覗きにゆく丈の元氣が無かつた。で彼はたゞ遠くから二階の障子を見凝めてこゝはB街ではない、従つてこれは、遠野が嘘をついたのではない限り彼女の家ではないとそんなことを考へながら暫く其處に立つてゐたのだつた。

すると驚いたことには、すぐに又その格子戸が開いて先刻のまゝのとみ子が、笑ひながら彼の方へ近寄つて來たのである。道助は不